

## 27 ご ぜ 石

伝承地：横山町

話者：20



(草むらにたたずむごぜ石)

宮内の坂の石は、一見なんの変哲もないように見えるが、この石にはごぜがからむ悲しい物語が伝承されている。

江戸時代の話です。毎年、冬になると雪に閉ざされてしまう北陸地方から、多くのごぜが各地へ旅にでました。宇都宮周辺には越後(新潟県)からごぜがやってきました。

ある年のことです。ごぜは、いつもの年と同じ道を通り旅を続けて宇都宮にやってきました。しかし、その年は、ひどい凶作で村人は自分達の食べ物にさえこと欠きありきまでした。楽しみの少ない村人にとって、村人が一堂に集まってごぜたちの三味線の弾き語りや歌を聞くことが冬の唯一の楽しみでした。

けれども、その年は、ごぜの宿になるはずの家のほとんどが固く戸を閉めてごぜを泊めませんでした。村人はいじわるしたわけではありません。ごぜたちを泊めても、出すたべ物がなかったからでした。泊る宿のないごぜは、空腹なうえに北風の吹きすさぶ夜を野宿して過す日が続きました。それでも、ごぜたちは次々と村を回りました。

そして、ある日の夕方、ごぜたちは念仏坂を宮内に向かって登っていきました。しかし、宮内に着いても泊めてくれるかどうかかわからないと思うと、目の見えない空腹のごぜたちは歩く元気を失ってしまいました。そこで、ごぜたちは道の横にあった石の横に身を寄せあって一夜を過ごすことにしたのですが、その夜は特に冷え雪もちらつくほどでした。

次の日の朝、仕事に出かけた村人たちは、石の陰で身を寄せあい重なるように息をひきとっているごぜたちの姿を目の当たりにしました。

これ以後、村人たちはこの石を「ごぜ石」と呼んだということです。

なお、念仏坂はここで凍死したごぜたちのめい福を祈って名付けられたともいわれています。

宇都宮市の北部で河内町と境を接する山合いに宮内(横山町内)と呼ばれる小さな集落がある。

宮内に行くには、今も急な坂を越えなければならぬ。この坂は、念仏坂と呼ばれており坂の頂上付近には、この地区の人々が「ごぜ石」と呼ぶ石がある。

ごぜとは、目が不自由なため人並みの仕事ができず、生活のため三味線を弾き、歌をうたうなどして金をこい各地を旅して歩く女の人たちである。

